

ここ 20 数年、日本における鳥たちの世界は、著しく変動している。かつて、普通に生息していた鳥が、現在では著しく減少し絶滅に瀕している一方で、日本における生息分布を急激に拡大するとともに、その生息数を増加させ、人間社会と新たな軋轢を生じさせている鳥もいる。ここでは、そのような日本における生息状況が著しく変化している鳥の現状を、日光地方に生息している（生息していた）鳥たちを例に紹介する。また、こうした鳥たちの変化をいち早く察知するためのモニタリング調査への野鳥観察者の協力の必要性についても報告する。

1. 著しく減少した鳥

1) ヒクイナの減少。本種は、湿地の草むらに生息する鳥で、古来より親しまれてきたが、1980 年代後半から著しく個体数が減少した。戦場ヶ原では 1970 年代までは普通に生息していたが、1980 年代後半以降まったく記録されていない。また、2003 年に栃木県全域で詳しい生息調査を実施したが、3 か所合計 4 羽を記録したに過ぎなかった。環境省によって実施された緑の国勢調査の 1970 年代後半と 1990 年代後半の繁殖分布を比較すると、全国で著しい生息分布の縮小が確認された。その結果、2007 年 12 月に改訂された環境省のレッドリストでは、新たに絶滅危惧Ⅱ類に選定された。そこで、バードリサーチでは 2006 年から 2008 年に全国を対象にしたアンケートと野外調査を実施した。その結果、山形県や宮城県など東北地方でも生息が確認されたが、東日本では生息記録が著しく少なかった。一方、関西地方や九州南部、沖縄県ではまだ普通に生息していることが確認された。本種の減少の理由は、宅地化や圃場整備により湿地環境が消失したこと、乾田化によって水田での食物資源が減少したことが考えられる。さらに、東日本は本種の生息分布の縁に位置するため、環境の悪化によっていち早く影響を受けた可能性があった。

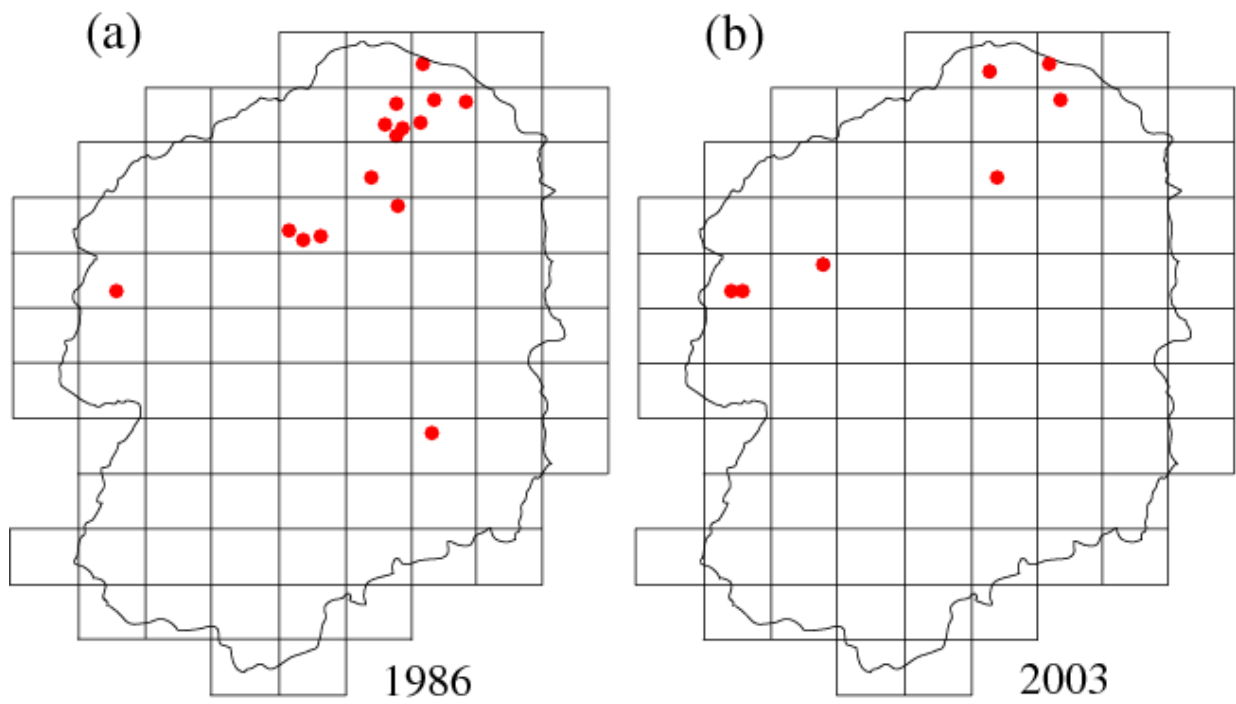
2) アカモズ、チゴモズ、サンショウクイ、ヨタカ、コサメビタキなどの夏鳥の減少。アカモズとチゴモズは 1990 年代中ごろ以降に著しく個体数が減少し、環境省のレッドリストでは絶滅危惧ⅠB、絶滅危惧ⅠA と絶滅の危険性が著しく高い種に指定されている。栃木県ではこれらの種は、おもに旧西那須野町から黒磯市、那須町などに生息していたが、これらの地域では 1995 年ごろから生息が確認されなくなった。サンショウクイやサンコウチョウ、ヨタカは人里に近い丘陵林などから姿を消したが、日光地方など山沿いの森林が多く残る地域にはま

だ生息している。これらの鳥が減少した理由は、越冬地である東南アジアの環境悪化（熱帯林の伐採）や繁殖地である日本の里山の生息環境の悪化が考えられる。



かつては初夏の戦場ヶ原の代表的な夏鳥だったヒクイナ（撮影：渡辺美郎氏）

3) 栃木県など一部の地域で生息数が減少しているオオジシギとコサギ。オオジシギは、初夏の戦場ヶ原を代表する種で、ハトより小型の嘴と脚の長いシギの1種で、「雷シギ」の別名がある。主に本州中部以北の湿原や草原に生息し、冬はタスマニアやオーストラリアに渡る。本種は、栃木県では1986年には少なくとも約50羽が記録されたが、2003年と2004年には14羽と12羽がそれぞれ記録されたに過ぎず、近年著しく減少した。ただし、戦場ヶ原などでは著しい減少はみられていない。減少の理由としては、1986年当時に生息していた伐採跡地の草原が宅地や森林に変わったことによる生息環境の消失と、牧草地における牧草の刈取り時期の変化が示唆された。北海道などでは生息状況に著しい変化がないと言われているが、日本全域の生息調査を早急に実施する必要がある。



栃木県におけるオオジシギの生息状況の変化

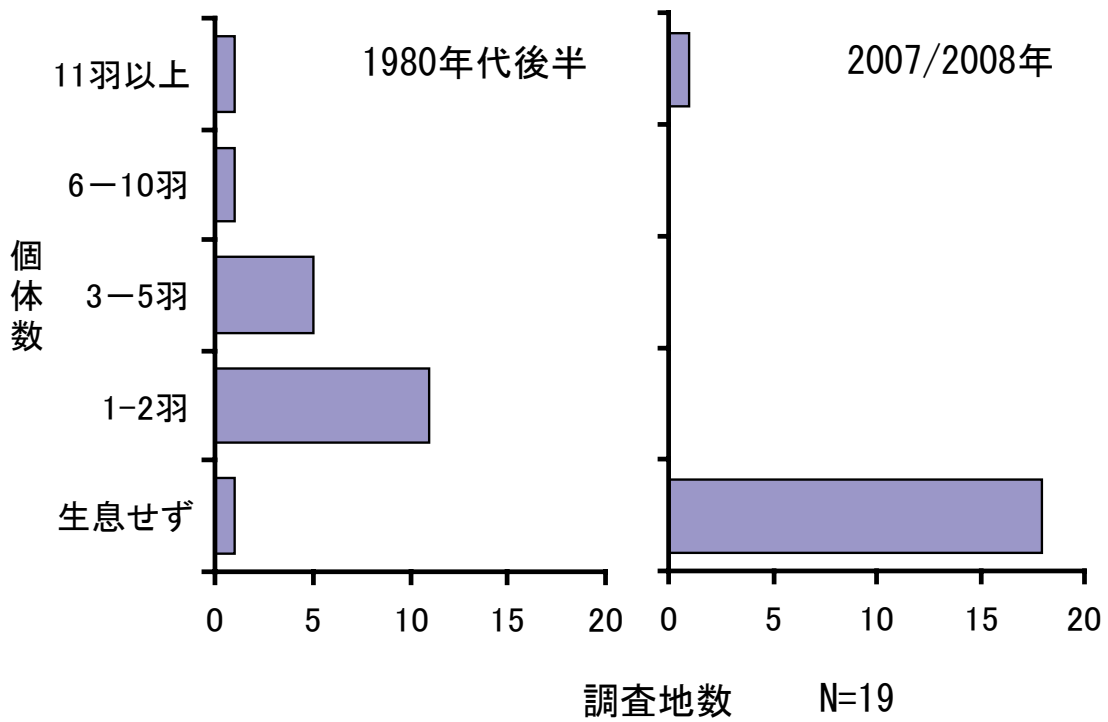


男体山をバックに朝もやの中で囀るオオジシギ

コサギは、従来、日本では最も普通のシラサギとして知られてきたが、近年、栃木県など関東地方では本種の減少を示唆する報告がある。そこで、1980年代後半にコサギの生息調査を実施した栃木県内19か所の河川で、2007/2008年の冬期に、再び同じ時期に同じ範囲で調査を実施したところ、19か所中18か所の河川でコサギの生息を確認できなかった。しかし、都市河川の1か所では43羽のコサギを確認した。そこで、日本におけるコサギの生息状況を明らかにするために、バードリサーチでは2008年4月からアンケートによるコサギの生息状況調査を実施している。9月20日までの情報に基づくと、多くの調査地ではまだコサギが生息している一方で、関東・東海地方では減少したという回答が50%あった。河川の調査地の情報を基に、河川の規模と生息状況の変化の有無を解析したところ、河川の規模が大きくなるにしたがって、減少したという回答が多い傾向が得られた。ただ、情報件数に地域的な偏りがあるため、さらに調査が必要である。

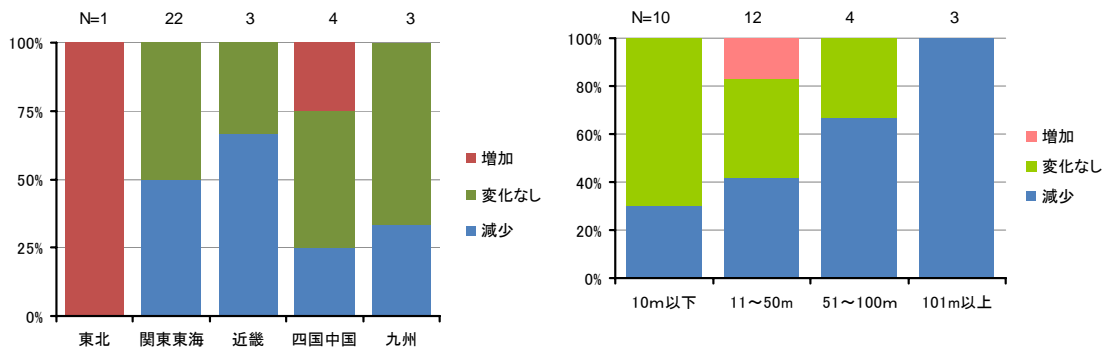


流れで餌を探すコサギ



栃木県におけるコサギの生息状況の変化

栃木県内の平野部の河川 19 か所で、流れに沿って 1 km の範囲に記録した最多個体数



河川の規模とコサギの変化の有無

地域別コサギの生息状況の変化の有無

NPO 法人バードリサーチのアンケート調査による



宇都宮市の繁華街のビルに止まるコサギ

2. 生息個体数が増加した鳥

1) カワウの増加。カワウは、1970年代ごろは、日本における生息数が約3000羽近くまで減少し絶滅の危機に瀕していたが、1980年代後半になると、次第に個体数が回復し、生息分布を拡大し、生息個体数も著しく増加させた。栃木県では1980年代中ごろまで、極めて少数が稀に記録されるだけであったが、1987年以降急速に増加し、次第に内陸へ分布を拡大し、宇都宮市や栃木県北部などでも生息するようになった。現在、日光市中禅寺湖や五十里湖など山間の湖沼や河川などほぼ全域で生息するようになった。そのため、内水面漁業との軋轢が増大し、現在では著しい社会問題となっている。カワウは、移動能力が高いため、保護管理には広域的な対策が必要である。2004年には滋賀県琵琶湖で標識された個体が栃木県真岡市井頭公園で記録された。



河川上空を群れで飛ぶカワウ

2) 大型の魚食性の鳥の増加。ほかの鳥類で増加傾向にある種として、アオサギ、ダイサギなどの大型の魚食性の種があげられる。アオサギは、栃木県では1980年代前半までは、極めて少数が記録されたに過ぎなかったが、1980年代後半ごろから徐々に増加し、1990年代中ごろには繁殖するようになり、現在では中禅寺湖をはじめとする栃木県内の多くの場所で繁殖している。ダイサギも近年個体数が著しく増加しており、山間部の河川などでも普通に生息するようになった。

カワウを含めた魚食性の種の増加の原因として、有害化学物質の規制が進み水質汚染が軽減されたこと、放流魚が多くなったことで、食物資源が豊富になるとともに、死亡率が減少したことが考えられる。また、河川構造が、単調になり、魚の隠れ場が減少したことも大きいと考えられる。



増加した鳥 アオサギ
現在は中禅寺湖湖畔でも繁殖している



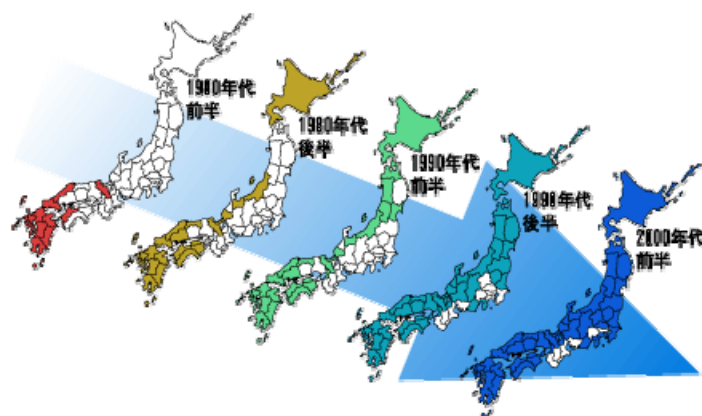
増加した鳥 ダイサギ

2) オオバンの増加。以前は、本種も栃木県では極めて稀に記録される種であったが、近年、著しく個体数が増加した。日光市中禅寺湖や湯ノ湖では冬期それぞれ 100 羽以上の群れが観察されている。本種は全国的に増加傾向にあるが、その理由は分かっていない。



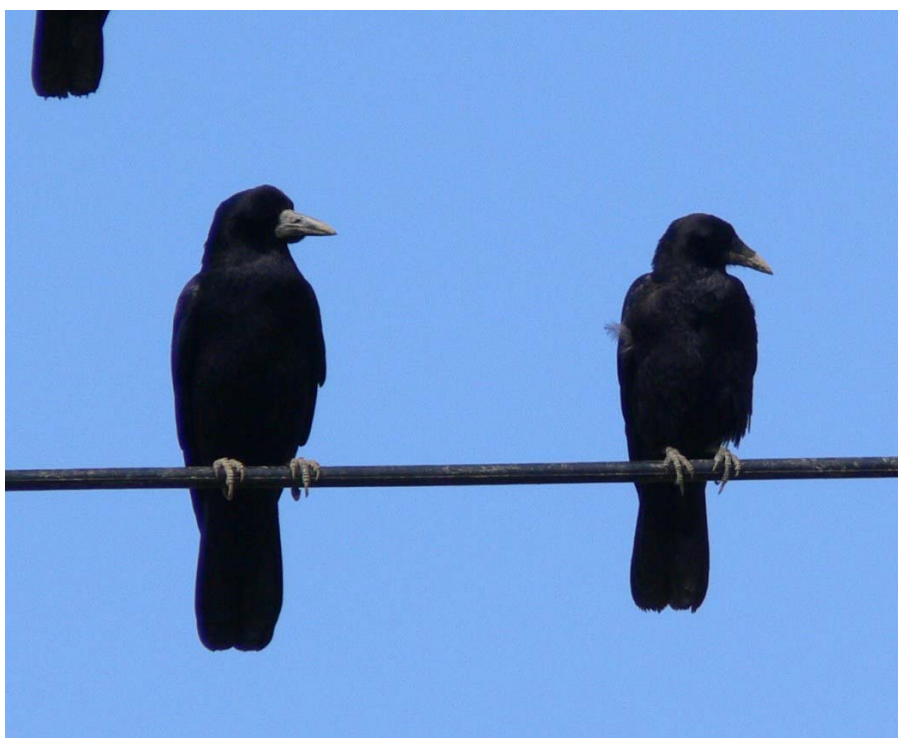
近年中禅寺湖や湯ノ湖などで増加したオオバン

3) ミヤマガラス、コクマルガラスの分布拡大。これらの種は、1980年代前半ごろまでは、おもに九州地方や中国地方の一部へ冬期に中国やロシアから飛来する冬鳥だったが、その後日本における生息分布が次第に広がり、2000年代後半ではほとんどの地域で普通に越冬している。ミヤマガラスは、栃木県の平野部では数百羽の群れも稀でなく、栃木県南部の渡良瀬遊水地周辺では1000羽を超える群れも観察されている。一方、コクマルガラスはミヤマガラスの群れに数羽から10数羽が混ざることが多い。これらの種の増加の理由は良く分かっていない。



日本におけるミヤマガラスの生息分布拡大の様子

(バードリサーチホームページより転載)



ミヤマガラス (左が成鳥、右が若鳥)



コクマルガラス (暗色型)

4) キビタキ、ヤマガラ、コゲラの増加。小鳥類では樹洞営巣性の種が増加している。これは、樹木が成長し、大径木となり、営巣場所である木の洞ができやすくなったり、里山が放置されることで枯れ木が多くなり、コゲラが増加し、シジュウカラ類の巣穴を提供するようになったと考えられる。



ヤマガラ



コゲラ

なお、ヨーロッパなどでは 1970 年代中ごろ以降、スズメやイエスズメ、ヒバリ、ホシムクドリなどといった農耕地に生息する鳥が著しく減少し、社会問題となった。現在、英国ではこれらの鳥はレッドリストに指定され、様々な保護対策が取り組まれている。わが国でもヒバリの減少を示す研究が報告されているが、日本ではこうした多くの身近な種の生息状況の変化を明らかにする詳しい調査は実施されていない。



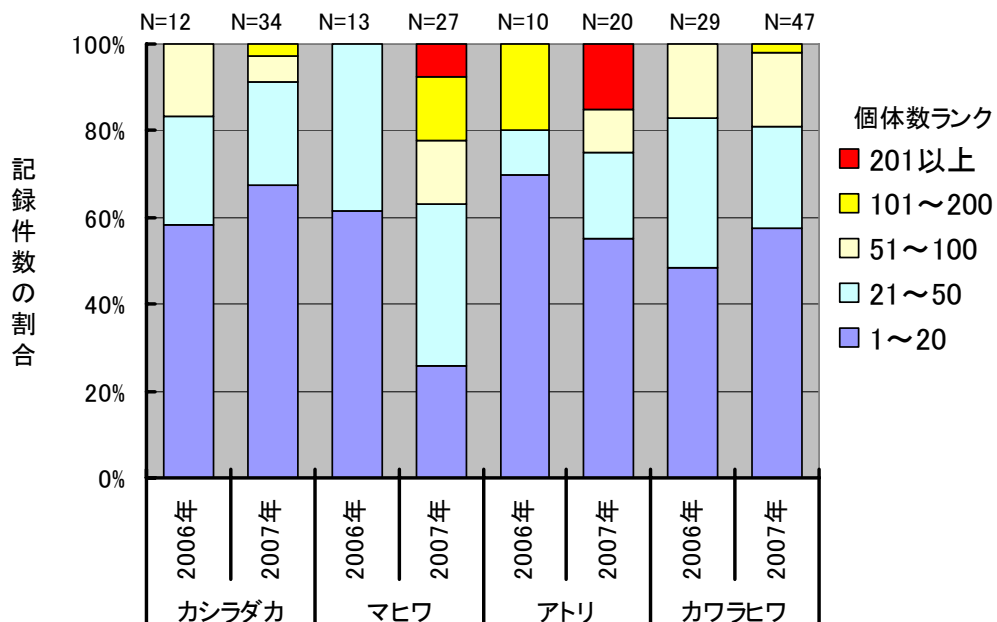
最も身近な野鳥のスズメ 日本では生息状況の変化はまったくわかっていない



農耕地の代表的な鳥ヒバリ

そこで、身近な鳥たちの生息状況を把握するためのモニタリング調査が重要である。2003年から環境省ではモニタリングサイト 1000 を実施し、長期に渡った様々な生物のモニタリングを実施している。しかし、モニタリングは、多方面からの様々な調査が大切である。たとえば、野鳥観察者の多くは、センサスなど詳しい調査をしなくとも市民参加型の調査（初認調査など）に参加することで、全国的な鳥の経年的な変動を解明するために貢献することができる。バードリサーチでは、インターネットを用いて、いろいろな市民参加型の調査を実施している。たとえば、季節前線ウォッチ：ウグイスやカッコウ、ヒバリ、ツバメ、ジョウビタキ、ツグミなどの初認調査。冬鳥ウォッチ：カシラダカ、マヒワ、アトリ、カワラヒワ、ハギマンコ、イスカの 12 月から 2 月の期間に観察した大まかな最多個体数調査。ベランダバードウォッチ：家の庭やベランダで冬と繁殖期にそれぞれ 5 日間 1 回につき 15 分間観察し、記録された種や個体数を報告する調査、通勤途中や散歩など頻繁に行く場所で観察した鳥の大まかな個体数を 10 日ごとに報告する調査。

こうした市民参加型の調査は、継続して長期に渡って記録を収集することで、鳥たちの生息状況の変化をいち早く察知するために役立つと思われる。そのためには、多くの野鳥観察者の協力が不可欠である。バードリサーチでは随時調査の協力者を募集している。詳しくはバードリサーチのホームページ (<http://www.bird-research.jp>) を参照されたい。



年によって飛来数が著しく変動する冬鳥（バードリサーチ 冬鳥ウォッチから）

マヒワとアトリは 2007 年にやや多く渡来した



年による渡来数の変動が著しいアトリ